

演題「胃癌の胃切除術後における栄養状態と貧血」

胃癌患者の胃切除術後の貧血と創傷治癒には栄養管理が大きく影響する。
今回、貧血と栄養状態の回復の経過を術前1ヶ月～退院後18ヶ月観察した。

【検査方法】

'04年9月～'05年9月に入院した胃癌患者62名(男性39名・女性23名、平均年齢66.4±11.6歳、全摘23名・亜全摘39名)について、胃切除術後の栄養摂取量・退院前の栄養指導、経時的な赤血球数(以下RBC)・白血球数・総リンパ球数・血液ヘモグロビン(以下Hb)・ヘマトクリット・血清Fe・ビタミンB12・総たんぱく(以下TP)・アルブミン値(以下Alb)・体重、鉄剤(錠剤・注射液)投与の調査を行った。

【結果】

TP・Albは術後徐々に上昇し術後3ヵ月で術前値に回復した。

RBC・Hbは術後徐々に上昇したが術前値までの回復は見られなかった。

男性より女性の方がRBC・Hbが低値であった。

鉄剤(+)群(-)群を比較すると、(+)群ではAlbが入院中は低かったが退院後3ヶ月以降は差がみられなかった。

鉄剤(+)群ではRBC・Hbの術前値も低く、RBCは入院中に差がなくなったが、Hbは退院後6ヶ月以降も低値であった。

鉄剤(+)群では全摘のRBC・Hbは亜全摘に比べ低値で6ヶ月以降減少傾向が見られた。

鉄剤(+)群の入院中経口栄養摂取量は(-)群より少なかった。

退院時食事摂取量8割以上のものでは8割未満のものに比べ体重増加が見られた。

【考察】

胃癌の胃切除術後の栄養状態の回復には、早期に食事療法を開始する方向での取り組みが必要である。

貧血改善の食事指導では鉄摂取に重点をおきがちであるが、鉄剤投与が胃切除術後の栄養状態のひとつの指標となる可能性が示唆されたため、エネルギー・たんぱく質等全体の摂取量に、より留意した指導が重要であると考えられる。

演題「高齢者の食とQOL(第5報)～「懐かし弁当」のグループ回想法への応用～」

我々は高齢者が“懐かしさ”を感じる料理及び調理法の調査を行い、高齢者の嗜好を反映した「懐かし弁当」を調製して、その主観的及び生理的指標を用いた「懐かし弁当」の評価について報告してきた(本学術総会‘05,’06)。

ここでは「懐かし弁当」を軽度認知症高齢者に対するグループ回想法の1つの“材料・道具”として用い、そのグループ回想法での効果を検討した。

【検査方法】

大阪府にある公立の特別養護老人ホームに設置した昭和30年代の日本の居間を模した部屋の中で、1クルー10回のグループ回想法を実施した。

参加者はアルツハイマー型認知症のため通院加療中の在宅高齢者で CDR1レベル、HDS-R12点以上の軽度の認知症高齢者で延べ31人であった。

1クルーの内1回、前回に予告して「懐かし弁当」を提供した。

そのグループ回想への導入は『旅行に関して、何か懐かしい食べ物の話が皆さん出てきていますが、お弁当を今日は用意していますので、よかったら、皆さんで召し上がってはいかがでしょうか』とリーダーが発言して「懐かし弁当」を提供しグループ回想への導入を行った。

会話はテープ等に記録し、のち逐語記録を行った。

【結果】

お弁当の提供時の会話の例として、「お花見とか行くときに、お母さんがお弁当をつくってくださったときには、大変ですね。」「子芋が、またきれいね。」「でも、おいしいわ。あっさりしておいしい。」があった。

また、このグループ回想法全体としては投影法検査による評価において著しい改善の認められた事例も見られた。

【結論】

今回は旅の思い出の中の「懐かし弁当」として提供したが、会話の内容とそれ以外の時の内容を比較したところ、“五感を刺激する”“懐かしい行楽弁当”として捉えられ、グループ回想法の“材料・道具”として有効であった。

日常的な食としてグループ回想法に導入した場合では日常の食に関連する回想が活発になる可能性もあると思われる。